病院図書館　2016;36(1):26-29

図書館員のツボ32

アメリカにおける選書理論

会誌編集部

Ⅰ．はじめに

今回はアメリカの選書理論について概観する。これらの理論は基本的に公共図書館のものである。公共図書館は税金によって運営され、国民、市民の知る自由を支える機関として、批判にさらされるという点で、専門図書館と大きく立場は異なる。選書の理論を概観するにあたっては2冊の図書を下敷きにした。ひとつは『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』[1] だが、選書論の第一人者河井弘志氏による非常に有名な著作で、日本における図書館学の金字塔と目されている。アメリカの選書理論についての知識は、ほとんどこの図書の孫引きではないかと思うほどである。もう1冊は『図書館は本をどう選ぶか』[2] で、やはり河井氏の図書を手がかりに選書論を概観しているが、網羅的かつ詳細に記述されている河井氏の著作の力点を知ることができる。安井氏の著作は選書ツアーに関する部分がとりわけ面白いが、大学時代の卒業論文がもとになっているというから驚く。

Ⅱ．選書理論の変遷

選書に関する理論で有名なのは、「要求論」と「価値論」の二元論だが、1936年にカーノフスキーが同時代の選書理論をそれらに分類できるとし、また前者から後者へ図書館界の世論が移りつつあると指摘したものである。選書理論は公共図書館ができたときに始まるといえるが、それは1854年のボストン公共図書館設立であり、その際の選書は「教育主義的」ということばでまとめられる。それ以前にすでにあった会員制の図書館は、上流階級によってつくられ同時に利用者であった。それに対し、公共図書館は上流階級の人々が設置者であったが利用者ではなかった。図書館は市民に教育を施す機関であったのである。同図書館初代理事長のエヴェレットはハーバード大学の学長も務めた人物だが、蔵書は一般的良書と学術書・研究資料であるべきとしたのに対し、理事のティックナーは通俗書を置くことを認め、それが民衆の読書習慣を育て、良書へ導くことができると考えた。これを「自然向上論」といい、多くの後継者が生まれた。それは要求を充足すること自体に意義を認める後の「要求論」と異なり、あくまで教育的効果を求めるものであった。

19世紀末には通俗書の利用が著しく増えたが、結局それが良書の利用に結びつかなかった。ここでいう通俗書とはフィクションのことである。この当時フィクションは価値が低く見られ、今よりはるかに低俗だと考えられており、フィクションを公共図書館でどのように扱うかが問われた。フィクション論争と呼ばれる。

1880年にボストン公共図書館の司書ハッバードが、同館がフィクションを多数購入していることへの批判を新聞に投書し、市だけでなく、図書館界全体をまきこんで激しい論争が起こった。ハッバードのフィクション受入に対する非難はすさまじく、各図書館は批判を恐れてフィクションの利用に制限を加え、購入数を削減した。図書の選択に対して過度に統制することは市民の読書への検閲行為となるとの意見が徐々に図書館全体に浸透していくが、通俗書に対して寛大であった「自然向上論」が効力をも

たないことを図書館員は知ることになる。ここで図書館は教育以外に、レクリエーションを目的とした資料の提供のあり方を認めることになる。カーノフスキーはここにおいて「価値論」から利用者の読書要求を肯定する「要求論」へ移行したとみなしたのである。

Ⅲ．主な選書理論

20 世紀初頭（1920 年代まで）には、より体系的に図書選択を検討する試みが進められた。数々の理論が生まれたが、あげられるべきはデイナの適書論、ボストウィックのニーズ論、マッコルヴィンの要求理論の 3 つである。

1．デイナの適書論

ニューアーク公共図書館長であったデイナは明らかに教育主義者、価値論者の立場にあった。有名な言葉に「適書が適者の手に適時に与えられねばならない」がある。進化論の影響があり、地域社会に適した蔵書を持って、住民にふさわしい図書を提供することで、公共図書館はその存在を確保できる。万人に対しての普遍的な良書という考え方を否定し、価値の相対的性格を主張、広い意味での要求論的図書選択論の基礎を固める役割を果たした。

2．ボストウィックのニーズ論

セントルイス公共図書館長であったボストウィックは、利用者の顕在的な「要求」と潜在的な「ニーズ」を峻別した。それは、看護師が患者の望むままに食物を与えていたら、結局患者を死に至らしめることになる。看護師の任務とは、患者の本当のニーズに基づいて食物を与えることであるのと同じ関係性である。ただし、看護師のように要求を無視することはせず、要求を肯定しながらニーズへの自覚を促し、要求とニーズの一致をはかる。利用者自身も気づかない層まで掘り下げたニーズを基準として図書選択を行えば、通俗書に偏る事態を避けられ、「要求論」の限界を「ニーズ論」は克服できる。このオリジナリティに富む図書選択理論は、しかしその後の図書選択理論に生かされることがなかった。その理論が図書ではなく雑誌に、しかも‘Library essays’というあいまいなタイトルで発表されたことも原因のひとつと思われる。

3．マッコルヴィンの要求理論

マッコルヴィンはイギリスの人で、ウェストミンスター図書館長であった。価値と要求を図書選択の最も基本的なファクターと考え、両者をかけあわせることによって各主題別の蔵書量を決定する指数を得ようとした。ただし価値と要求を対立概念とするのではなく、価値は要求の属性であり、要求の量と対立する。

R（主題表出指数）＝Va（主題の価値）×Vo（要求の量）

実際には要求の価値も量も計量化は不可能であるが、実践上の指針となりえた。マッコルヴィンの要求理論は、図書選択の理論というより読者の要求の理論で、社会学や社会心理学に属する理論と彼自身認めている。理論化が不可能と信じられてきた図書館学の中で、マッコルヴィンの要求理論が現れると、高い評価を受けた。ドルァリーがこの「要求論」を理論的に推し進め、アメリカで最初の本格的図書選択論を確立することになる。

しかし 1930 年代に入ると、「要求論」に対する批判が起こる。カーノフスキーは、「要求論」は図書選択における多数決の理論であり、知識の正しさは要求の多少で決定できるわけではないとし、間違った知識を市民に供給しかねない要求論を強く批判した。これは当時のファシズムとそれを盲目的に指示する大衆への不信感があったといわれる。

Ⅳ．読者研究の成果を取り入れた選書理論

図書の対極に位置づけられる読者に関する研究は、マッコルヴィンの要求理論によって、一定の進歩をとげることができたが、思弁的であって、現実の読者について実証的、科学的知識をもたらさなかった。教育学の分野では、早くより児童、成人の読書実態研究が行われ、その成果がシカゴ学派（シカゴ大学大学院図書館学研究科の学者たち）を通じて図書館学の領域に導入されてきた。

１．シカゴ学派の興味理論

ウェイプルズは、潜在的な読書興味を顕在化するためにさまざまなアンケート調査を市民に対して行った。その結果、主題への興味と読書行動の相関度が極めて低いことがわかった。読書行動は主題への興味以外の影響を受けていて、その要因を、図書の「読みやすさ」と「手に入りやすさ」であるとした。調査を通じて得られる「読書興味」が、読書行動から把握される顕在的要求とは別のものであることを明らかにした。

シカゴ学派の読書研究はそれ自体図書選択の基礎理論であり、イギリス人のウェラードはこの基礎理論を応用した最初の総合的図書選択理論を構成した。

２．ウェラードの三部構想

図書館の目的が草創期は社会改良目的のみであったのが、時代を経るにつれ、教育目的、娯楽目的、情報提供目的と付け加えられ、分化・複合化してきていた。ウェラードは、それとともに図書選択論が変化してきたことを確認し、図書選択にとって図書館の目的が決定的な意味を持っているとした。読者と図書を対等の関係に置き、両者を「図書館の目的」という第３のファクターで統合する「三部構想」を提唱した。

彼の三部構想は、図書と読者を図書館の目的によって統合する原理を確立し、のちのゴルドホアの目的理論への道を拓いた。

３．ゴルドホアの目的理論

20 世紀中盤ゴルドホアはウェラードの理論を受け継ぎ、シカゴ学派の理論を集大成した。図書館による図書選択が「利用者の性向」「図書の特徴」「機関の目的」を考慮に入れてなされ、前二者が三番目の「機関の目的」によって限定される。目的の決定は実際の利用に基づかなければならないとした。ゴルドホアは個人の読書行動と図書選択の関係を解き明かし、ここの読者の追求する効果という中間の概念を経て、個人の要求と図書館の目的を正しく結びつけた。この理論がその後の図書選択論を強く規定し、その後のアメリカ図書館界では、目的主導型の選択論が主流を占めて現在に至っている。

Ⅴ．おわりに

河井氏は大部の著作のあとがきで、当初選書理論の諸説は相互に脈絡を持たず、無原則な交替だと思っていたが、資料を分析・比較すると、関係が直接的なものは系譜性を示しているが、系譜が異なるものは、やはり全く別の世界を形成していることが明らかになったと一番に述べている。選書理論の変遷を一連の流れとして把握することはできないということなのである。また著名な理論の主なところだけを並べてみても、理解が進まないどころか、大いに誤解を招く可能性がある。それぞれの理論にはそれぞれの言葉の定義があり、その意味は現在私たちが使っているものと異なるかもしれない。どの理論も当時の社会情勢と切り離すことはできないが、それを実感するのは難しい。当時の人たちの選書に対する考え方を正しく理解し、評価することはなかなか容易ではない。しかし一方でまちがいなく現在も図書館で日々選書は行われており、その方針はこれらの理論の上にある。有効な選書を行うために、今日の選書の礎となるものを知っておきたい。

参考文献

1）河井弘志．アメリカにおける図書選択論の学説史的研究．東京：日本図書館協会；1987.
2）安井一徳．図書館は本をどう選ぶか（図書館の現場；5）．東京：勁草書房；2006.
3）河井弘志．米国図書選択論史．小黒浩司編著．図書館資料論 新訂（新現代図書館学講座；8）．東京：東京書籍；2008．p. 70-9.
4）二村健．コレクション形成理論の史的展開．藤田岳久編著．図書館情報資源概論（ベーシック司書講座・図書館の基礎と展望；8）．東京：学文社；2016．p. 50-3.

（文責：増田　徹/藍野大学中央図書館）